

緊急災害時における聴覚障害者の 情報伝達保障支援の状況分析

森本明（福島大学人間発達文化学類）

3.11 巨大地震と巨大津波の襲来

- 災害緊急時における避難
- 長期にわたる退避生活
- 確実な避難指示の重要性
- 確実な退避生活における情報伝達の重要性

3.11 以降 震災後の活動内容

- 福島県内の避難所におけるコミュニケーション支援
- 防災教育を新たな見直しや緊急災害時における情報保障の新たな見直しの必要性



避難所ご担当 様

聴覚に障害があることや様々な理由で聞こえに不自由している方はいらっしゃいませんか？ そうした方に個別に丁寧なコミュニケーション支援ができるよう活動していますので、お気軽に何なりとお申し付けください。

福島大学人間発達文化学類
森本明研究室

TEL&FAX : 024-548-8139

morimoto@educ.fukushima-u.ac.jp

被災した聴覚障害者の声

11.06.26

- いつもの生活に戻れないはじめての経験
- ライフラインが無い・食料入手困難
- 従来のテレビとメール中心の情報入手困難
- 防災意識を高めること、日頃からの災害への備え

調査のねらい

- 聴覚特別支援学校における防災教育の現状の一端を把握し報告すること
- 調査結果を今後の防災教育のあり方を考える資料とし活用すること

調査の手順

- 調査対象・規模
聴覚特別支援学校小学部101校
- 調査方法
質問紙による調査・郵送調査法。質問紙は村山(2009)をもとに作成
- 調査時期
平成23年5月20日に質問紙を郵送
平成23年6月8日までに返送

考察のための視点

東日本大震災の特徴から

- 津波が大きな被害をもたらしたこと
- 長期にわたる退避生活を余儀なく強いられていること
- 災害から互いに身を守ること、生活の不安を互いに軽減することの根幹は、正確な情報の伝達にあること

1. 調査の配布数と回収数、回収率

配布数	回収数	回収率
101	72	71.3

2. 避難訓練の実施状況



- 年に3回避難訓練を行っている学校が約半数。
- 年に2～4回避難訓練を行っている学校が7割。

0回	1回	2回	3回	4回	5回以上
1	4	16	35	7	9

3. 避難訓練の想定



- 火災、地震、不審者侵入を想定した避難訓練が多い
- 津波を想定した避難訓練を行っている学校は約1割
- いずれも災害発生時や一時避難を想定したものが多くことが予想される

火災	地震	不審者侵入	津波	洪水	土砂崩	雷雨	その他
71	70	49	9	1	1	1	4

4. 避難訓練の内容

避難誘導	71
消防署や警察署、地域との連携	63
初期消火	59
情報伝達	55
地震についての講話	50
スモークハウス体験	24
地震体験車体験	19
保護者への引き渡し	16
応急処置の技能	8
避難所支援活動	0
その他	5

- 避難誘導がほぼ全ての学校で取り上げられている。
- 情報伝達が8割弱の学校で取り上げられている。
- いずれも災害発生時や一時避難を想定したものが多くことが予想される。

5. 避難訓練を除く防災教育の内容と方法

地域の自然環境や災害の学習	31
地震体験車体験	20
まち歩き	16
スモークハウス体験	15
模型教材を使った指導	14
応急処置の技能	10
防災マップづくり	7
その他	7
副読本を使った指導	6
ボランティア活動について	2
消防等の学外講師による指導	0
避難所宿泊体験	0

- 体験的な学習の機会を取り入れている
- 避難所宿泊体験が行われていない
- 地域の特性に応じつつ日々の生活を想定した学習の展開
- 長期にわたる退避生活への備え

6. 使用されている教材

- 文部科学省
「災害から命を守るために～防災教育教材～」 等
- 都道府県教育委員会等
「地震防災教育ビデオ ろう学校用」（静岡県）
「みんなで学ぶ防災知識」（宮崎県） 等
- 社会福祉法人 聴力障害者情報文化センター
「地震！ その時（手話版）」 等
- 民間
「うっかり家の人々」，「地震だ！ 火を消せ！」 等

7. 防災教育の課題

	特に課題だ	課題だ
防災教育の時間を十分に取れない	13	28
適切な教材がない	7	28
指導方法がよくわからない	3	13
教職員の研修がない・少ない	1	22
教職員間の共通理解が図りにくい	0	10
地域から協力を得るのが難しい	0	7

- 防災教育の時間の確保や適切な教材の開発
- 研修の機会の充実

8. 各学校におけるさまざまな工夫

- 避難訓練，防災教室における視覚的な情報保障
スケッチブックなどに進行表や内容について簡単な説明を書いて見せるなど
- 人形劇の活用や絵本や紙芝居の活用
デフ・パペットシアターの人形劇「稲むらの火」から，津波や震災時の避難，震災時の避難，震災等の際には，聴覚障害があると，様々な情報が得られにくいことなどを学習
- 防災センターの活用
地震，火災，風水害の体験を行った。

- 安全マップの作成
登・下校時の不審者対策，災害対策等のため，地域に協力依頼
- 電話お願い手帳の携帯
手帳にあらかじめ備わっている使い方の他，安全マップや連絡先等記入した様式を貼り付ける
- ニュースや新聞記事の利用
日常的に危機意識を育てる。その状況におかれたらどうするか考え合うことを積み重ねていく

- シュミレーション

大雨・洪水等でJ Rが遅れたり、止まったりすることがあるので、そのときにまわりの情報をどう入手し、どう判断して的確に行動するかを考える

- 自立活動の時間の活用

学校からの声

- よりよい教材また調査研究の結果等、何らかの形で教えていただけるとありがたい
- 防災教育について、事例を見る機会がないので、他校での取り組みがあれば紹介してほしい
- 模擬避難所体験などを要望する声もある。

- 災害時に児童（聴覚障害児）に情報が伝わるインフラが整備されているとは言えない。現在は、児童に対応力をつけるしかないが、なかなか難しい。

- 災害緊急時に幼児・児童・生徒が「学校にいる場合」，「自宅にいる場合」，「通学途中」における学校としての対応，取り組み，家庭との連携等，各学校の支援体制のあり方を知りたい。

調査からわかってきたこと

- 津波を想定した防災教育の必要性
- 退避生活を想定した防災教育の必要性
- 防災教育に係る教育実践事例を紹介し合う等研修の機会の充実